

貨幣の銘文について

吉池孝一

1. はじめに

貨幣の銘文は、文字の研究にとって、とりわけ文字学の入り口から中を覗こうとするものにとって、格好の材料となると思っている。そこで貨幣の銘文と文字にどのような特徴を認めることができるか日頃考えているところを書いてみた。なお、貨幣には硬貨と紙幣があるが、ここでは硬貨のみを扱うことにする。さて、初期の貨幣には文字のないものもあるが、ふつう貨幣には何かしらの文字があり銘文の体裁をとっている。一字だけのものもあれば、単語・短文のものもあれば、比較的長い文もある。いま仮に、紀元前二世紀頃のものとおもわれる貨幣銘文を任意に取り上げ眺めてみると次のようである。

これは前漢の武帝が発行した五銖銭の系統のものである。これには片面に漢字・漢語で“五銖”と貨幣単位のみが書かれている。裏に文字はない。



表



裏

次に紹介するものはインド西北の所謂インドグreek朝のメナンドロス(ミリンダ)王が発行した貨幣である。表にギリシア文字・ギリシア語で“救済者たる王メナンドロスの”とあり、裏にはカローシュティー文字・ガンダーラ語で“救済者たる大王メナンドロスの”とある<sup>1</sup>。



表



裏

<sup>1</sup> 中村 2004 参照。

このように一口に銘文と言っても、それぞれに随分と様子を異にするわけであるが、このような貨幣の銘文と文字を取り扱うことの便宜とおもしろさはどこにあるのだろうか。これよりこの点につき考えてみるわけであるが、その前に貨幣と他の古物との相違について確認しておきたい。

## 2. 古物としての貨幣の特徴

中国貨幣史の名著とされる彭信威 1965 は、他の古物に見られない貨幣の特徴として次の三点を挙げる。一、硬くて破損しにくい。一、数量が多い。一、広範囲に散布されている。彭信威 1965 はこの三点により、もしも或る貨幣が古代に使用されたならば必ず発見されるはずであり、逆に長年の間発見されないならば、そのような貨幣は発行されなかったとすることができるという<sup>2</sup>。なるほど、貨幣にあっては発見されていないものは存在しなかった蓋然性が高いというのはおもしろい考えである。

比較的新しいものにアンドリュー・バーネット 1998 がある。これによると、他の考古学資料にくらべコインには次の特徴があるという。一、数量が多く耐久性があり、残りやすい。一、注意深く扱われ保存状態がよい。一、国家による公式な資料としてデザインや銘は政治や宗教の情報を提供する。一、文献資料に現れない経済情報を提供する。一、簡単に且つ正確に年代決定ができる<sup>3</sup>。

以上を要するに、貨幣は金属で大量につくられるため残りやすく保存状態も比較的良いということである。なお、貨幣の図像や銘文が示す資料としての質について、アンドリュー・バーネット 1998 は“国家による公式な資料”というが、かならずしもそういうわけにはいかず、時と所の違いにしたがい、さまざまな状況があったのであろう<sup>4</sup>。

## 3. 貨幣銘文のおもしろさ

貨幣の銘文と文字を取り扱うことの便宜とおもしろさにつき、いま思いつくままに挙げると次の四点ほどとなる。

---

<sup>2</sup> “而錢幣之爲物，和其他古物不同：第一它必定是堅固不易毀滅的，這是金屬貨幣的一個優點；第二它必定是數量很多的，因爲人人要用它；第三它必定是散佈很廣的，因爲各地都要用它。所以只要古代使用過錢幣，一定會被發現。反過來說，如果這許多年來沒有發現巴比倫和埃及古代的錢幣，我們是否可以認爲，它們在公元前第八世紀以前還不曾鑄造錢幣。”（序言 1 頁）

<sup>3</sup> “大量のコインが 2000 年以上も前から造られ続けている。たとえば大英博物館には 50 万個を越えるコレクションがあり、ブリテン島だけでも毎年およそ 3 万個が発掘されている。金属、それもしばしば貴金属からできているので、コインは他の人工物よりはるかに残りやすい。またコインというかたちゆえに注意深くあつかわれ、安全のために貯蔵庫に入れて埋め隠されることが多いので、今日まできわめてよい状態で保存されることになった。

コインは他の考古学資料と比べ、国家によって公式なものとして造られたという特徴をもっている。このことはコインが提供する情報が本質的に他の遺物と異なっていることを意味しており、コインのデザインや銘は、政治的事件や宗教や文化に関する体系的な詳細を伝えてくれる貴重な資料となっている。2000 年以上にもわたる貨幣は、文献資料にはほとんどあらわれない経済についての情報を提供する。また大量に造られ、かなりの数で残存してきた事実が、数量的にその社会の経済史の解明の機会を与えてくれる。

コインは年代がわかると、デザインのもつ意味や経済についてかなり正確に考察することができる。コインはかなり高い確率で残されており、銘が公式なものなので、考古学遺物のなかで最も簡単に、最も正確に年代決定ができるからである。”（7-8 頁）

<sup>4</sup> 彭信威 1965 は、中国の早期貨幣にあっては政治的な単位による鑄造以外に単位内部の地方都市における鑄造と流通のあったことを指摘する。61-62 参照。

1. 銘文は短く完結している。
2. 同種のもものが複数ある。
3. 規範的な表現形式や字形・字体となっている。
4. 比較的容易に年代と地域を特定することができる。

貨幣の銘文は貨幣という小さな面のなかで完結しているのがふつうである。したがって、短いけれども完結した意味が意図されているはずだと、われわれ後代の読み手は確信することができる。たとえ判読に着手した時点で読めなかったとしても、これは読み手に安心感をあたえる(1の効用)。もっとも、貨幣自体が欠落していたり摩滅していたりして、銘文の一部が見えない場合もあるが、そのような場合は、同種の貨幣が多数発行されているわけであるから、互いに参照することにより銘文を復元することができる(2の効用)。

次に、規範的であるという点であるが、貨幣は特別な事情がないかぎり、同一規格のものを大量に生産し流通させることを目指すわけであるから、その銘文を記すために選ばれる文字と、その文字を用いた表現形式の適否について念入りに発行者によって検討されるにちがいない。その結果、規範的な字形・字体や表現形式を採用することになるわけであるが、これまでの規範すなわち習慣的な型から外れるようにみえる場合でも、それは“偶然の所産ではなく発行者の何らかの意図がこめられている”と想定することができる。したがって、文字や表現形式によって発行者達の意図(あるいは規範意識)を考察することができるということになる(3の効用)。

最後に、発行年代と地域という点であるが、貨幣の銘文に年号や権力者の名前が記されている場合、比較的容易に貨幣が発行された年代を定めることができる。もっとも、影響力の大きな人物の発行に係る場合は、その死後も同一の貨幣が発行され続けるということはあることで注意を要するが、それでも大きさや重さ図像など貨幣がもつ他の情報により、ある程度時代を特定することができるようである。同様に発行地域も銘文の内容や記号により特定し得る場合がすくなくない。いずれにしても、同時代の様々な記述をも参考にして発行年代と発行地域は決定されることになる<sup>5</sup>(4について)。

#### 4. おわりに

このようにして発行年代と地域が特定された貨幣はさまざまに利用される。文物に銘があるばあい年代がわかる貨幣の文字との比較をとおして文物の年代を予想することができるし、年代がわかる貨幣と共に発掘された出土物は貨幣により年代を予想することもできる。

この効用は、文字・銘文自体の研究にも及ぶ。これによって、規範的な字形や正書法および表現形式の変遷につき年代をおって調査することができる<sup>6</sup>。貨幣銘文の表現形式の変

---

<sup>5</sup> 貨幣製造の時代と場所の決定法については、アト・リュウ・バーネット 1998 の第 2 章「年代決定と特徴」が参考となる。もっとも、当該書は古代ローマの貨幣を主資料とする。

<sup>6</sup> 彭信威 1965 は、中国貨幣の上に漢字書体の大きな変遷が示されていると指摘する。“因此在中國的錢幣上，也反映了中國文字書法演變的痕迹。先秦貨幣上的文字，可以說是古篆。它和甲骨文不同，因為兩者書寫的工具不同；它不同於鐘鼎文，因為鐘鼎文是當時文化水平很高的統治階級所寫的，而錢幣上的文字乃各地同鑄錢有關的人所寫的，可以說是民間的文字。秦半兩以後，錢幣上是用小篆。但六朝時已有隸楷的出現，唐代則完全用隸書，或所謂八分書。北宋錢上有行、草，太平天國錢上有簡體字。”(序 5 頁)

遷が同時代の政治や経済や宗教などの変化と連動していると予想し得るばあいもあり<sup>7</sup>、そのようなばあいは貨幣銘文の変化を傍証の一つとして利用することもできる。また、貨幣銘文が未解読文字資料の解読の契機となる場合もあるようだ。未解読文字資料の解読にあっては、未知の文字資料が存在するという認識があって、それではじめて解読に着手することができるわけであるから、目にする機会が比較的多い貨幣に未知の銘文が記されている場合、貨幣が解読の契機となるというわけである<sup>8</sup>。

【参考文献（発行年順）】

- 彭信威 1965. 『中國貨幣史』, 上海人民出版社。初版は 1958 年。第二版は 1965 年。第二版の第 3 次印刷 1988 年による。
- モーリス・W・M・ポープ著/唐須教光訳 1982. 『古代文字解読の物語』新潮社。
- アンドリュー・バーネット著/新井佑造訳 1998. 『大英博物館双書⑥古代を解き明かす コインの考古学』學藝書林。
- 吉池孝一 2002. 「貨幣文字考 —西夏文字—」, 『東洋哲学研究所紀要』第 17 号, (82)-(94) 頁。
- 中村雅之 2004. 「カローシュティエ文字貨幣 3 種」, 『KOTONOHA』第 22 号, 1-3 頁。
- 吉池孝一 2007. 「西夏文字の解読」, 『KOTONOHA』古代文字資料館発行(愛知県立大学 E511 内)第 56 号, 11-18 頁。

---

<sup>7</sup> 吉池 2002 は西夏国で発行された西夏文字銭の銘文の変遷と政治状況との関連について言及したものである。

<sup>8</sup> 地中海東隅のキプロス島の貨幣に未知の文字があった。この貨幣を契機としてキプロス音節文字の解読に繋がったことは有名である。この点についてはポープ 1982 の 169-185 頁参照。シルクロードの文字としては、インド西北のカローシュティエ文字、中国西北の西夏文字をあげることができよう。前者についてはジョナサン・ウィリアムズ 1998 の 167-168 頁で簡単に触れるところがある。後者については吉池 2007 参照。またインド西北を中心栄えたクシャン朝のギリシア文字・バクトリア語資料の解読にあっても貨幣は大きな役割をはたしたようである。